

明治末の五高の独語教師たち

先日、五高記念館の資料を調べていたら、ドイツ語教師たちの写真二枚を発見した。これまでも五高教職員の集合写真は幾つか見たことはあったが、独語教師だけの写真というのは珍しい。その点で貴重な資料だ。その一枚は「明治四十五年六月プラウト氏送別記念」と注記があるもので、熊本の岩田写真館にて撮影したもの。写っている人物は傭外国人教師のプラウトを中心に白川精一、多久安美、小島伊佐美、山田鉦太郎、宇佐美全賢、椎名十三、三浦吉兵衛、菊地行蔵である。他の一枚はこれより少し前に撮られたと推定されるもので、プレントツェル教師を中にしてプラウト以外の上記の教師たちと、もう一人桑野礼治が写っている（本書の表紙参照）。これらの人々が明治末の五高ドイツ語科のほぼ全スタッフであった（留学中の長江藤次郎は写っていない）。彼らに対して現在では関心を寄せる人もいないようだが、それだけにここに簡単なプロフィールを記しておくのは無駄ではあるまい。（着任順）

小島伊佐美は金沢の人。明治31年7月東大独文科卒後、直ちに五高に赴任、昭和7年教授退職後も講師として昭和19年まで教壇に立った。文字通り五高ドイツ語科のシンボリック的存在であった。五高での教え子で、第二次大戦でシベリア抑留中に亡くなった独文学者小島貞介はその養子。

山田鉦太郎は慶応3年8月5日群馬県館林生まれ。明治26年独逸学協会学校卒業。一時警視庁に勤めた後、大阪医学校助教授、第二高等学校医学部独語講師を歴任し、明治34年に五高に迎えられ39年教授。大正3年9月16日病気のために依願免本官となった。

桑野礼治は新潟県士族で明治5年3月7日生まれ。明治21年に東京本郷の私立独逸語学校に入り3年間独語と普通学を学んだが、さらに独逸学協会学校でも研鑽を重ねた。一時東京帝国大学図書館に勤務した、明治32年熊本陸軍地方幼年学校の独語囑託教授となって来熊した。その後陸軍通訳として活躍、明治39年に至り五高教授に任命された。龍南会雑誌にもしばしば寄稿、「生きた百科全書」として



前列右より多久安美、小島伊佐美、プラウト、三浦吉兵衛、白川精一
後列右より椎名十三、菊地行蔵、山田鉦太郎、宇佐美全賢

知られた名物教授であったが、大正元年9月6日広島県忠海町の海岸で水泳中に永眠した。

白川精一は明治13年12月10日福岡県築上郡上城村生まれ。福岡県立豊津中学校で5年間修業後、熊本の五高に入学し、3年間修業。明治39年7月東大独文科卒業、直ちに母校五高に赴任、囑託講師を経て、40年12月五高教授となった。大正11年新設の福岡高等学校教授へ転任した。

日本人教師の中で唯一人洋服

姿の三浦吉兵衛は旧仙台藩の人で明治10年2月18日生まれ。東大独文科在学中に訳詩集『西詩余韻』を上梓。明治36年卒業後、直ちに山口高等学校教授に任命された。その後七高造士館教授を経て五高教授となったのは、明治40年3月のこと。だが同45年7月には一高教授に転任した。

菊地行蔵は明治4年11月8日仙台生まれ。二高を経て明治30年東京帝国大学文科大学へ進学したが、二年後、一年志願兵として歩兵第四連隊に入隊。陸軍歩兵曹長までになったが、そのため東大独文科を卒業したのは明治36年7月であった。その後再び陸軍に入り、翻訳の仕事をした。五高の独語教師になったのは明治41年3月のこと。大正4年には南洋諸島へ出張。大正9年8月16日付新設の佐賀高等学校へ転任になった。

宇佐美全賢は越前福井の人。明治7年12月8日生まれ。四高を経て東大独文科卒業。山口高等学校教授、広島高等師範学校教授を歴任後、明治41年7月五高教授に任ぜられた。写真を見ると、短軀だが古武士の風貌をしている。ラテン語も担当した。大正13年独語及び語学教授法研究のため文部省留学生として渡独。昭和10年9月10日を以て五高教授を辞した。

ヨーゼフ・プラウトは1884年生まれ。父はヘルマン・プラウトといいベルリン東洋語学校の日本語教師であった。ギムナジウムを経てベルリン大学に入学、はじめ英語、仏語を学び、後にゲルマン語学、ドイツ語学、文学史、文明史及び美術史を修めた。来日直前にゴットフリート・ケラーの『七つの伝説』に関する研究により哲学博士の学位を得た。父が東洋語学校の教師であったため、家には永年日本人が多く出入りしていたので日本への興味を覚え、早くから独語教師として日本へ行きたいと考えていた。1909（明治42）9月1日、五高の独語とラテン語担当の教師として採用され、1912年（明治45）7月31日解傭となった。この間一時私立熊本医学専門学校の講師を勤めた。大正3年より5年頃まで陸軍中央幼年学校の独語教師を勤めた。

ヴィリー・プレントツェルは1884年シュタンダール生まれ。ハイデルベルク、ベルリン、マールブルク各大学でゲルマン文献学、歴史及び哲学を研究し、1907年マールブルク大学にて哲学博士の学位を取得。その後ケルンの官立学校で独語と歴史を担当。兼ねてから外国と外国人に興味を持っていたので、その方面の仕事に就くことを希望していた。五高での雇用期間は1907年明治42）9月1日より1911年（明治44）8月31日まで。帰国後はベルリンのステューグリッツのギムナジウムに勤めた。第一次大戦中に出征したが発病の為、除隊。大正11年再度来日、佐賀高等学校に勤め、同15年3月退職。日本研究家でもあった。

多久安美は旧姓鍋島。明治14年1月25日肥前国神埼郡城田村生まれ。五高を経て東大独文科卒業。明治43年8月五高の独語嘱託講師。1年後教授。龍南子弟の教養のために努め、生徒からも敬慕されたが、病気のため大正6年1月9日世を去った。

椎名十三は明治13年6月8日福島県伊達郡梁川町生まれ。仙台二高を経て東大独文科を卒業し陸軍戸山学校に通訳として勤務。五高の独語教師となったのは明治43年9月である。大正6年8月28日辞職。

なお五高記念館には、これらの教師たちの詳細な履歴書が保管されていることを付記しておく。